



日本マーク・トウェイン協会

April 2015

NEWSLETTER HPサンプル特別編集版

What Stand Shall We Take?

後藤和彦(第7期会長)

今年のMLA(Modern Language Association)の年次大会に、“The Single-Author Study”というセッションがあり、「これは」と思い聴きに出かけた。MLAのセッションは、たとえセッション全体を主催しているのが、“The Mark Twain Circle of America”のように本来単独の作家を扱う団体であっても、個々の発表はトウェインと誰か別の作家が、場合によっては2、3人抱き合わせになっているのが当たり前になっているという印象があったからだ。またトウェインなどの「大作家」と組み合わせられるのは、耳にしたこともない作家ばかりだというのが、この印象を一層強くしていた。このセッションにはマイラ・ジェーレンも出ていて、彼女の『まぬけウィルソン』論はとても感心していたので大いに期待したが、結果、「単独作家研究」は役に立つし、あつてしるべきだが、それ自体としては少なくとも分が悪い、端的に弱い、つまり、現今のMLAのあり方を基本的に追認するのに終始した。Ph.D.論文でひとりの作家しか扱わないのはよしとされないし、のちの就職や出版のことを考えるとよいよ敬遠される傾向にあるという切実な口ぶりの声もフロアから聞かれた。

複数の作家を同時に研究する、ということは、それらの作家の特定の作品群をつなぎとめておくテーマをあらかじめ持つということだ。予定されるテーマはほとんどもつぱら、文学に隣接する歴史学や政治学や心理学の領野からもたらされる(今回の大会には“The William Faulkner Society”主催の「フォークナーと食習慣」というセッションさえあった)。これは、アメリカ文学研究が容赦なく外気にさらされており、外気にさらされていることが自分たちの文学研究の健全さや政治的な正しさを担保するものと見られているということなのだろう。とりあえず、作品論(あるいはテキスト論)は今は作家論より優勢である。あるいは、作家論が従来の素朴な作家論からだいぶ変質してしまったと言ふべきなのかもしれない。

これが文学研究の不可逆の展開ならば、たとえそれが不可逆ではないとしても、旧に立ち返ることより、単独作家研究がテーマ研究のなかで生き残る道を模索するほうがより積極的な姿勢ならば、さて一単独作家協会はいったいどのように身を翻してゆけばよいのか、ひとつまともに考えてみる必要があるだろう——この際、伝統的作家論の最後の砦たろうという一種反動的な姿勢を、作家協会が取ってはいけない謂われもないであろうし。

2015年4月、日本マーク・トウェイン協会第7期執行部、始動いたしました。会員の皆様、これまで以上のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

＜特別寄稿エッセイ＞

今なお「地球一の有名人」

——2013年から2014年までのマーク・トウェイン

シェリー・フィッシャー・フィッシュキン

Shelley Fisher Fishkin

(Stanford University)

かつてマーク・トウェインは「地球一の有名人」と自らを呼んでいたが、死後104年を経た今でも、「全地球上」とまではいかないかもしれないが、「全米」を舞台に並はずれた存在感を醸し出している。本稿では、2013年から2014年におけるトウェインの姿に触れ、いまだに彼が重要な問題を我々に考えさせ続けている様子を、次の3つの出来事を例に指摘しておきたい。

(1)トウェインゆかりの重要な新博物館「ジムの旅—ハック・フィン・フリーダム・センター」(Jim's Journey, the Huck Finn Freedom Center)がミズーリ州ハニバルにて開館。加えて、同館ホームページ [www.jimsjourney.org]も開設。(2013年9月21日開館。2014年6月16日ホームページ開設)。

(2)全米動物・社会博物館(The National Museum of Animals & Society)(カリフォルニア州ロサンジェルス)の企画展「暗闇の中の光—ヴィクトリア時代から現在までの反動物解剖の営み」(Light in Dark Places: Anti-vivisection from the Victorian Era to Present Day)が開催。(2014年5月10日—8月3日)。同企画展でトウェインの役割が鍵となる。

(3)ドキュメンタリー映画の刺激的新作、『ホルブルック／トウェイン—アメリカの知的探求の旅』(Holbrook/Twain: An American Odyssey)(スコット・テームズ監督、ローラ・D・スミス制作)が盛大な式典とともにワシントンD.C.で初上映(2014年6月18日)。サム・クレメンズより長きに亘ってトウェインを演じた天才を描く。

(1)ハニバルを訪れた旅行者がハイウェイを下り、マーク・トウェイン歴史地区に入って最初に目にする建物が同市の最も新しい博物館、ジムの旅—ハック・フィン・フリーダム・センターである。この博物館は、奴隷たちによって1839年に建てられたとされるわずか一部屋の石造りの建物、オールド・ウェルシュマンズ・ハウス(老いたウェールズ人の家)の中に設けられており、因みにこの家は『トム・ソーヤー』にも登場している。実際、取り壊されそうになっていたこの家をマリオン郡歴史協会が救い出し、数ブロック離れた元の場所から現在の住所、509 N. 3rd St. に移築したのである。

同博物館の生みの親で館長のフェイス・ダントによれば、私の二つの著書『インジャン領ことんづらして』と、『ハックは黒人か？—マーク・トウェインとアフリカ系アメリカ人の声』に刺激を受けたとのこと。私はこの二つの本の中で、強いきずなで結びついた家族を何世代にも亘って育み、事業を起こすなど、真面目な奴隷の未裔たちが人種隔離や差別にめげず成功をおさめていた事実を町の歴史から消し去ることで、奴隷を有した自らの過去に目を向けようとしてこなかったハニバルへの批判を展開した。中でもトウェイン作品が形作られる際にアフリカ系アメリカ人が果たした重要な役割に関する拙著の分析と、トウェインが著作と行動の両面において人種主義と対決した姿を追った部分にダントは動かされたのであった。ハニバルが自らを語る際、アフリカ系や人種主義に触れることをかたくなに拒否する姿勢にダントは違和感をもっていただけでなく、そういったハニバルの物語から自らが排除されていると感じ、傷ついてもいたのだ。そこで新たな博物館では、こういった無視されてきた歴史を前面に押し出し、これまで軽視されてきたマーク・トウェインとアフリカ系アメリカ人との密接な関係に加え、人種主義を突き崩すためにトウェインが払った努力をも取り込む形で、排除されてきた町の歴史を将来の世代のために救い出し、そして保存することをダントは決心したのである。

尚、2014年6月に同博物館の魅力的なホームページ[www.jimsjourney.org]も開設した。博物館のヴァーチャル・ツアーに加え、「マーク・トウェインとアフリカ系アメリカ人」、「ハニバルのアフリカ系アメリカ人の歴史」、そして「ハニバルの著名なアフリカ系アメリカ人たち」といった内容の展示が、同ホームページで見られるようになっている。

ハニバル市長、教育長、マリオン郡歴史協会代表、地元メディアなどが参加するなか、新博物館の開館が盛大に祝われ、テレル・デンブシーやロバート・ポール・ラムといったトウェイン研究者とともに私も開館記念式典に同席するという光栄な機会に恵まれることとなった。式典に出席するため、アメリカ各地に散らばっているハニバルの黒人コミュニティ出身の人たちがハニバルに帰郷しただけでなく、同式典ではラリー・マッカーシーによる講演も行われた。因みに、マッカーシーはサム・クレメンズが夏を過ごした農場の奴隷であったダニエル・クオールズの直系の子孫で、農場で聞いたクオールズの語りに若きサムは感銘を受けただけでなく、『ハック・フィン』に登場するジムの性格の一部はこのクオールズに基づいている。当時人種隔離されていたハニバルの学校を出た後、多くの重職を果たして国のために尽力した(元)米国陸軍准将で同式典の委員長、ドナルド・L・スコットに加え、米国議会図書館の副館長や最高執行責任者などが取り仕切中、開館記念式典は催された。

南北戦争中、オールド・ウェルシュマンズ・ハウスは北軍の武器弾薬の保管場所として使用されたが、新博物館も独自の理由で極めて火のつき易い危険な品々を保管している。というのも展示品の中には、町が隠そうとした過去の動かしようもない証拠品が含まれているからだ。例えば、白人を黒人か



ジムの旅——ハック・フィン・フリーダム・センター(2013年9月ミズーリ州ハニバルに開館、2014年6月ホームページ開設)。マーク・トウェインの故郷で忘れられたアフリカ系アメリカ人の歴史に光をあてている。

* Photo Courtesy of Shelley Fisher Fishkin

ら分離して、黒人たちの生活の場が出来るだけ限られた場になることを確実にした標識などが展示されている。言ってみれば、町に住む黒人たちが困難にめげずに挙げた大きな功績を物語る勲章や賞状に対峙する形で、ジム・クロー時代の「黒人待合室」といった標識が見え隠れするのである。実際、同博物館の目的と意義は入口近くにある次のような言葉に集約されている—「今を生き、将来に備えるには、我々はまず過去を尊重することを学ばなくてはなりません。ようこそ！」尚、ジムの旅博物館は5月1日から10月1日まで開館し、月曜から土曜は午前11時から午後5時まで、日曜日は午後1時から午後5時まで開館している。



全米動物・社会博物館(2014年1月ロサンゼルスに開館)、2014年5月から8月まで開催された動物解剖反対運動に関する企画展でトウェインの文章が紹介された。

* Photo Courtesy of Shelley Fisher Fishkin

(2)全米動物・社会博物館で2014年5月10日から8月3日まで開催された企画展「暗闇の中の光—ヴィクトリア時代から現在までの反動物解剖の営み」を私が最初に知り得たのは、同企画展を進めていたジュリア・オアーが、拙著『マーク・トウェインの動物本』の「あとがき」から多くを抜粋して企画展で使いたい、と私に許可を求めてきたからであった。同企画展ではトウェインの動物解剖反対の主張が重要な役割を果たしており、「ある犬による物語」や「ロンドン反動物解剖協会への手紙」といったトウェインの文章が紹介されている。同博物館の生みの親であり館長のキャロライン・マレンが6月に同博物館で話をするよう私を招いてくれ、私は喜んで引き受けたのだった。科学という名の下、動物虐待を正当化することへの反対運動が、国境を越えた熱気に満ちた運動であったことを跡付ける展示品の中、高い関心をもった活発な聴衆と、動物や動物の権利、そして動物実験に関するトウェインの考えを共有するのは楽しい経験であった。トウェインやジョージ・バーナード・ショー、ルイス・キャロルらの重要な文章の展示に加え、動物実験反対を唱えた芸術家や婦人参政権論者、職能組合や医者その他、数々の人々の意見が同企画展で紹介されていた。

実際の企画展は8月に終了したが、企画展のオンライン版が同博物館のホームページ www.museumofanimals.org でまもなく開設予定である。全米動物・社会博物館は2014年の初頭に開館したが、同博物館の最初の企画展の一つに、トウェインの言葉やイメージが注目を浴びる形で紹介されたことは嬉しい。

(3)ワシントン D.C.で5日間こわって開催されたアメリカ映画協会(AFI: The American Film Institute)の年一度のドキュメンタリー映画祭 AFI-DOCS のオープニング作品として、スコット・ティームズ監督、ローラ・D・スミス制作による『ホルブルック/トウェイン—アメリカの知的探求の旅』に白羽の矢を立てるといふ見事な決断を AFI は下した。如何にしてハル・ホルブルックがサム・クレメンズよりも長きに亘ってマーク・トウェインとなりえたかを描いたこの素晴らしい映画が、アメリカのドキュメンタリー映画にとって最高の注目の舞台上で初上映の機会を得たことは、この映画にとってまことに相応しい出来事であった。私は同映画の顧問として協力の機会を得たことに加え、短時間とはいえ同映画に出

演したこともあり、スコット・ティームズが他の映画制作者やハル・ホルブルック本人とともに私をこのワシントン D.C.での盛大な初上映の場に誘ってくれたのである。マーク・トウェインを現代に生き生きと蘇らせるのに絶大な貢献をした人物を称えるこのような素晴らしい機会を逃すことなど私にはとても出来なかった。グレーがかった白黒の映像によって、歴史を描いた場面が現代のインタビューと違和感なく溶け合い、社会批評家、真実の語り手、執拗な批判者、アメリカの良心としてのマーク・トウェインが、来年には90歳になるホルブルックによって、墓から生き生きと甦ってくる様子をこの映画は実に見事に描いている。ホルブルックは持って生まれた天賦の才と勇気を伴った道徳心で、「今夜、マーク・トウェイン！」の公演を毎回感動的でオリジナリティ溢れる内容にしたが、この力強い映画にはそういった彼の姿が輝きをもって描かれている。

マーク・トウェインは、「現在」についても多くを語りかける「過去」の厳しくそして困難な局面について考えるよう我々に迫ってくる。そして、本稿で紹介した全ての事例は、トウェインがそういった力を現在も持ち続けていることを物語っている。さらに、これらの事例はマーク・トウェインが深い関心を寄せた問題—我々にとっても、いまだ重要な問題—に私たちが積極的に関わっていくよう、トウェインが今なお我々を刺激し続ける姿をも物語っているのだ。

(石原剛 訳)



『ホルブルック／トウェイン—アメリカの知的探求の旅』（スコット・ティームズ監督、ローラ・スミス制作）、2014年6月に開催されたアメリカ映画協会(AFI)ドキュメンタリー映画祭、オープニング・ナイトで初上映。

★2014年度第18回総会・大会が開催されました！



基調講演中の井川真砂氏

(日本マーク・トウェイン協会第6代会長)

第18回総会・大会は2014年6月21日(土曜日)、明治大学駿河台キャンパスにて開催されました。総会に続いて開催された大会は例年と異なり、ディケンズ・フェロウシップ・日本支部との合同大会となりました。大会では、日本マーク・トウェイン協会会長の井川真砂氏とディケンズ・フェロウシップ・日本支部長の佐々木徹氏による基調講演を皮切りに、ミシシッピ川の蒸気船に関する描写やトウェインによるディケンズ評、さらにはブレット・ハートなど同時代作家との関係やセンチメンタリズムの扱いなど、様々な観点からトウェインとディケンズの文学的接点が論じられました。

その後、トウェイン協会からは講師として里内克巳氏(大阪大学)、宇沢美子氏(慶應義塾大学)、ディケンズ・フェロウシップからは天野みゆき氏(県立広島大学)、松本靖彦氏(東京理科大学)をお招きして、里内氏の司会の下、ディケンズのアメリカ旅行記『アメリカ紀行』とトウェインの関係を論じたシンポジウムが開催されました。シンポジウムでは、国際著作権、先住民や移民、奴隷制、ブラックフェイス・ minstrelsyといったテーマの下、両作家の文学世界が対比され、興味深い議論が交わされました。そして、大会の締めくくりとして、佐々木支部長と

井川会長に再び御登壇いただき、大会総括と基調講演の補足が行われたほか、両作家の作品に関する率直な読後感などが語られ、本音を交えた楽しいトークが展開されました。



アメリカ便り No. 4

10年間に亘り、英文号の編集でも大変お世話になっておりますメアリー・ナイトン先生から、ヴァージニア大学が有するトウェイン関係の資料を中心に、とても貴重な御報告を頂きました。トウェイン研究者やトウェイン・ファンにとって、まことに有益な情報が散りばめられています。是非、ご一読ください！

EXPLORING THE BARRETT COLLECTION

Mary A. Knighton

ACLS/SSRC/NEH International and Area Studies Fellow

Virginia Foundation for the Humanities

University of Virginia

Charlottesville, Virginia

The irony hardly escapes me, yet it does sting a bit to say it aloud: when I live in Japan, I tend to be absorbed in teaching American literature and always searching there for elusive materials, yet when I am in the U.S., as I am now, surrounded by fine libraries full of rare materials in American literature, I am working on a project about Japanese literature, missing Japan's archives... Rather than bemoan my twisted fate, though, in this short missive from abroad to my colleagues and friends in the Japan Mark Twain Society, I embrace this opportunity to investigate the University of Virginia holdings of Twain materials and report back to you.

Mumbling nervously about writing a "Letter from Overseas" for our Twain newsletter, out of the blue I contacted Professor Stephen Railton in the English Department at the University of Virginia (UVA). Any worries were unwarranted: Professor Railton is down to earth and easy to talk with about all matters Twain. Railton maintains a highly respected website pertaining to the life and work of Clemens/Twain, which is referenced by the Mark Twain Papers and Project Online and other major Twain archives. "Mark Twain in His Times" (<http://twain.lib.virginia.edu/index2.html>) is chock full of information and a genuine pleasure for students, teachers, and scholars alike to explore (Go ahead, test yourselves on the Memory Builder game!). I had a cursory acquaintance with the fact that UVA's library harbored treasures for scholars of American literature, including Twain materials, so I met with Railton to find out more.

What I learned is that The Albert and Shirley Small Special Collections Library, housed in the subterranean spaces of the same building as the Harrison Institute for American History, Literature, and Culture, absorbed The Barrett Collection, which had previously been open to the public since 1960 via Alderman Library. The library for Special Collections takes up some 80% of the striking four-story Harrison building completed in 2004, all underground and illuminated by skylights. The Barrett Collection gets its name from UVA alumnus (Class of 1920) and Virginia native, Clifton Waller Barrett. Barrett's career had long been in business, not literature, serving in the top echelons of the North Atlantic and Gulf Steamship Company, Inc., then during WWII, as Director of Sugar Transportation for the War Shipping Administration. He only began collecting literature in the late 1930s, but within a

few short decades had amassed the works of some 1000 authors, with virtually complete collections for over half of them. He targeted American literature from 1776 – 1950, with an ambitious aim to collect “everything” of merit by an American and in American literature between 1820 and 1870, in particular. Besides manuscripts and letters, the complete collections, often first editions, of major writers post-1875 are included. A few highlights of the Barrett Collection: the most extensive collection of Charles Brockden Brown’s works and letters; the only existing copy of Robert Frost’s first volume of poetry, “Twilight”; all of Poe’s major works in original bindings, plus letters from and to Poe; the earliest and latest surviving letters of Nathaniel Hawthorne; the world’s most extensive collection of Lafcadio Hearn/Koizumi Yakumo (for which Barrett even came overseas to Japan); letters of Herman Melville, Emily Dickinson, and Louisa May Alcott, among many others.* But what about Twain?

The Barrett Collection holds over 1400 manuscripts and letters of Samuel Clemens from 1882 to 1910. These include records of his Virginia City days in Nevada, his business dealings, and family matters; the manuscripts of *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County*, and parts of his collaboration with Charles Dudley Warner in *The Gilded Age*, Susy Clemens’ biography of her father, and his, in turn, of her; and corrected proofs of his *Autobiography*. Railton drew my attention to what has excited his interest in teaching and researching Twain for some time: primary materials in the Barrett Collection relating to the subscription system and prospectuses used by Twain and his publishers to market and sell his books (See Railton’s digital site exploring *Huck Finn*’s not one but *two* prospectuses, the first defaced in a most humorous manner for us today but certainly shocking in its time: <http://twain.lib.virginia.edu/huckfinn/hucprohp.html>). Besides these documents, most unique, perhaps, are the only known surviving texts for Clemens’ collaboration with Bret Harte in *Ab Sim* and with William Dean Howells in *Colonel Sellers*. Those of you who, like me, have read Stephen Railton’s essay, “The Twain-Cable Connection” in Messent and Budd’s *A Companion to Mark Twain* (Blackwell, 2006), know that he is a scholar of Twain on stage; consequently, it should come as no surprise that Railton has intriguing points to make about what Barrett primary documents reveal about Twain’s role in writing *Ab Sim* as an ethnic performance for C.T. Parsloe.

Directing me to his Twain website, Railton showcases there a webpage dedicated to *Ab Sim*. There he discusses the rivalry between Harte and Twain for popularity and profits from stage productions. In a hyperlinked series of pages, Railton takes pains to untangle how and where racist stereotypes dominate over sympathies for Chinese immigrants in Harte’s and Twain’s writings. His analysis is too detailed to recap in full here but suffice to say that he notes an ironic edge to Harte’s “Plain Language from Truthful James” (later, “The Heathen Chinees”) largely missed in its popular culture reception, and for Twain’s part, both scorn for mob treatment of immigrants and occasional exploitation of stereotypes for comic effect. When the relationship between Harte and Twain broke down in the process of producing the play, Twain was left to revise and adapt the play alone in response to reviewer comments and his own inclinations. Twain’s expansion and revisions to Act 1 of *Ab Sim* suggest an exaggeration of Chinese stereotypes, Railton contends. The fifteen pages of this manuscript written in Twain’s own hand survive in the Barrett Collection; in the end, to understand how the play was actually performed, we must compare this with

* See more details at their website:

<http://small.library.virginia.edu/collections/featured/the-clifton-waller-barrett-library-of-american-literature/>

reviews in contemporary newspapers and other documents. We understand better this process, thanks to Railton's inclusion on his site too of some contemporary reviews and broadsheets (elsewhere, he includes prospectuses that hint at how consumers may have shaped Twain's writing). He also steers us to the only other manuscript extant for *Ah Sin*, the Barrett Collection's undated promptbook written in Twain's hand for one of the play's performances: it is entitled "Ah Sin: Mr. Parsloe's Original Creation in 4 Acts." One cannot help but wonder how Twain's contribution to the character of Ah Sin further aided Parsloe's continuing rise as a yellowface actor or helped to sink the short run of the play's performances in 1877.

Let me conclude by telling you about a strange quirk of the Barrett Collection: Mr. Barrett had a "sentimental" interest in presentation volumes inscribed to authors' mothers (as described by Herbert Cahoon, curator of the Pierpont Morgan Library, at the conclusion to his "Brief Account" of the Barrett Collection in 1960). Not only do we have several major literary works by Emerson, Thoreau, and Melville inscribed for presentation to their mothers, but also a first edition of *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County*, wherein we find the words: "To My Mother the dearest Friend I ever had & the truest." Writing from my home in Virginia to my second home in Japan, perhaps it is only fitting to end this "letter" on such a sentimental note.

★エルマイラ大学 Mark Woodhouse 先生の特別講演会が開催されました！

エルマイラ大学マーク・トウェイン・アーカイブ研究員 Mark Woodhouse 先生による特別公演“The Summer of 1903: Mark Twain's Last Visit to Quarry Farm”が、2014年10月16日(木)に早稲田大学にて開催されました。講演前半には、他の家との比較を交えながら、クオリー・ファームがトウェインにとっていかに理想的な仕事場であったのか、家族のノートやトウェイン一家の生活ぶりをとらえた珍しい写真などを適宜紹介しつつ説明がありました。続いて講演後半では、1903年夏のトウェイン最後のクオリー・ファーム滞在中の創作と読書の密接な関係が分析され、トウェイン直筆の書き込みのある蔵書資料など、エルマイラ大学が保管する貴重な一次資料が多数言及されました。特に、動物愛護の作品としても知られる“A Dog's Tale”と Robert Browning の詩“Tray”との関係、また英国の歴史家 William Lecky の歴史書に対するトウェインの詳細な書き込みと“No.44, The Mysterious Stranger”で展開されるキリスト教観と



の関係については、詳細な分析が行われました。そして講演最後には、Woodhouse 先生ご自身が長年研究を進めている仏教思想とトウェイン晩年の思想の類似性へも話が及び、新たなトウェイン理解の可能性が示されました。旺盛な「書き手」としてのトウェインはよく知られていますが、彼が一読者としても実に能動的な「読み手」であったことを、まざまざと感じる講演内容でした。エルマイラ大学で27年もの長きにわたりトウェイン関連資料の整理・収集に携わってこられた Woodhouse 先生ならではの貴重な資料もスライドで多数紹介され、実に充実した一時間半となりました。ご講演頂いた Woodhouse 先生はもとより、ご来場いただいた皆様、そして先生の来日にご尽力いただいた会員の皆様に、この場を借りまして心より御礼申し上げます。



Young Clemens at Call No. 4

協会の若い声を取りあげて掲載します。「若い」とは必ずしも重ねた年齢の多寡のことではありません、トウエインがオリヴィアに生涯“youth”と呼ばれていたように。どなたでも、事務局までぜひ若々しい声！

Folklore と Fairy Tales

一現実と空想の狭間で

細野香里(慶應義塾大学・院)

Folklore(民話)と fairy tales(おとぎ話)は似て非なるものである。前者は民衆の生活の中で育まれてきた口承説話であり、後者は子供に語り聞かせることを主目的とした非現実的な作り物語である。マーク・トウエインは、微妙に異なるこの二つのジャンルとどのように関わってきたのだろうか。

『トム・ソーヤーの冒険』(1876年)や『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885年)、『ミシシッピ川的生活』(1883年)といった作品名を挙げるに及ばず、マーク・トウエインは民話と切っても切り離せない関係にあり、多くの先行研究が指摘しているところである。実際、トウエインは1884年から85年にかけて、ジョージ・ワシントン・ケイブルと講演旅行を行い、自身の作品のうち民話をベースとした部分の抜粋を朗読している、1888年にはジョエル・チャンドラー・ハリスらとともにアメリカン・フォークロア・ソサエティの創立委員となった。そのハリスは、著作『リーマスじいやのした話』(1880年)の序文において、「伝承をそのままの形で保存する」という真摯な目的を述べているが、トウエインの上記の一連の作品も、口語体で南西部の生活文化を活写したという点で、ハリスと意志を共にしており、民衆の生活をありのままに記録するという意味で現実主義的だと言えるだろう。ヴィクター・ロイス・ウェストが『マーク・トウエイン作品における民話』(1930年)で詳述しているように、アフリカ系アメリカ人の口承文化やミシシッピ河畔の地域に根付いていた民話についての深い造詣は、ウィリアム・ディーン・ハウエルズによって「アメリカ文学のリンカーン」と称されたトウエインのデモクラティックな側面と呼応し合う。

対して、トウエインは非現実的なおとぎ話に無関心

な人物であるとみなされがちであるし、作り話よりも旅行記や伝記、自然科学関係の書籍を好んで読むと述べてもいる。しかし、トウエインの蔵書には空想的な物語が皆無だったわけではもちろんない。スージー、ジーン、クララの3人の娘に恵まれたトウエインが、全くおとぎ話と無縁に過ごしたとは考えにくい。実際、トウエインは1907年に子供向けのおとぎ話のアンソロジーの撰者の一人として、「アリババと40人の盗賊」を選出している。さらに、『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想』(1896年)序盤、トウエインはドンレミ村の幻想的なブナの木を描いている。子供たちはその木に住む妖精たちを喜ばせようと、花輪を作って枝に掛ける。ヨーロッパの田園風景と、ブナの木に宿る妖精たちは、トウエインが幼いころから見聞きし、また作品中に描きこんできたミシシッピ川流域に伝わる民話と極めて異質なものである。しかし、ジョー・B・フルトンによる、『ジャンヌ・ダルク』執筆においてトウエインはおとぎ話、叙事詩、聖人伝の3つの類型を用いたとの指摘を鑑みても、彼がおとぎ話の構造に意識的だったことは確かである。

現実主義者としての側面と相反する、晩年の神秘主義への傾倒や、生涯を通じて抱いていた夢への関心も、長らく議論されてきたトウエインの一側面である。民話とおとぎ話の二つのジャンルとの関わりは、この一見矛盾するトウエインの思想・関心の理解の一助となるかもしれない。

マーク・トウエインとの運命の出会い

杉山真弓(千葉大学・院)

マーク・トウエインの作品に初めて触れたのは子供の頃、『王子と乞食』や『トム・ソーヤーの冒険』の子供版だった。なんとなくトウエインは児童文学の作家だと思っていたから、法政大学の久保博先生のゼミに

入って講義を受け、目からウロコが落ちた。原書のページをめくるとトウェインが偉大な作家であることをまざまざと感じた。当時の大久保ゼミでは *Roughing It* の翻訳を学生が輪番制で発表したこともあった。インターネットどころか電子辞書すらなかった時代、分厚い紙の辞書を図書館で苦労してひきつつ訳したのは懐かしい思い出である。この2度目のトウェインとの出会い、そしてその時の翻訳の勉強がきっかけでわたしは翻訳家を志すことになった。

紆余曲折を経て翻訳家となって10年、この年でまた大学の門を叩くことに躊躇しつつも、翻訳をするために改めてアメリカ文学を学びたいと入った千葉大学の院でトウェインと3度目の出会いをした。女性の権利獲得、特に参政権運動に女性作家が与えた影響を研究することにしたところ、Marietta Holley (1836～1926) という作家を知った。Holley はトウェインと同時代に活躍し、そのユーモアあふれる作風から「女性版トウェイン」と評されたこともあったが、死後は文学史から忘れ去られた作家である。Holley を介して、わたしはトウェインとまた関わりを持つことになったのだ。

Holley は *Samantha* (別名 *Josiah Allen's Wife*) という年配の農家の主婦を主人公にしたシリーズ作品により、当時はベストセラー作家であった。方言丸出しでしゃべる、典型的な田舎者の *Samantha* は女性も参政権を獲得して男性と同等の権利を持つべきだと主張し、大統領や議員にまで会って堂々と自説を展開する。とはいえ、決して家庭をおろそかにはせず、料理上手で優秀な主婦であり、頼りない夫を心から愛し、夫の前妻の子供たちも大事にしている。自分たちの言いたいことを歯に衣着せずと言ってくれる *Samantha* は当時の *suffragist* の支持を集めた。女性の参政権運動を苦々しい思いで見っていたはずの男性にも Holley の

作品は人気だった。主人公をはじめとする登場人物たちのユーモラスな言動が多くの読者に受け入れられるカギになったと思われる。

トウェインが *Samantha* シリーズの2作目 *Samantha at the Centennial* を “brilliant, a great improvement on the first” (*Woman's Journal* 22[1878]) と評したという記録がある。彼が Holley の作品を読んだことがあったのは間違いない。ユーモアを売りにする同時代の女性作家の活躍ぶりをちよっと皮肉な目で見ていたトウェインの姿が浮かんできそうだ。

さらに、トウェインと Holley との意外な接点も見つかった。トウェインの本の挿絵画家の一人として知られるトゥルーマン・M・ウィリアムズが Holley の本の挿絵を描いていたのだ。初期の *Samantha* シリーズの出版社はアメリカン・パブリッシング社で、Holley に執筆を勧めたのがイライシャ・ブリスだったからだろう。奇しくも、Holley が生まれた Jefferson County の New York はウィリアムズの故郷の近くである。自身の作品のヒロインとは反対に恥ずかしがり屋で公の場にあまり現れなかった Holley だが、ウィリアムズとは交流があり、自宅に招いたこともあったようだ。

このように3度にわたって重要な出会いをすることになったトウェインはわたしの人生に多大な影響を与えてくれた。トウェインのすばらしさを教えてくださった大久保博先生は生涯の恩師であるし、翻訳は生涯の仕事である。そして、トウェインと同時代に活躍しながらも歴史から消えてしまった Holley のような忘れ去られた作家を研究することが生涯の課題となった。数々の名言を遺したトウェインだが、ここでは次の言葉で締めくりたい。「人は心で学ぶ。目や頭で学ぶのではない」

<ニュース> トウェインの曾孫、発見か？

本年6月、アメリカのメディアをにぎわせたニュースがありました。サウスカロライナ州に住む77歳の Susan Bailey という女性が、マーク・トウェインの子孫だと名乗り出たとのこと。「私はトウェインの子孫だ」と申し出る人はこれまでも数多くいたそうですが、今回は少し様子が違ったようです。ご存知の通り、トウェインの次女 Clara の一人娘、Nina Clemens Gabrilowitsch が1966年に死去したことで、トウェインの子孫は絶えたといわれてきました。ところが、Bailey 氏の説明によれば、Nina はヨーロッパ在住の折に、婚外子である自分を出産し、

子どもの頃にしばしば会った Clara のことを祖母とは知らず自分は Aunt Clara と呼んで育ったというのです。Nina の生涯を検証するとともに、自らがトウエインの子孫であることを伝えようと、Bailey 氏は DNA 鑑定の結果や Nina の日記の内容などを盛り込んだ本を出版しました。アメリカの全国紙 *USA Today* のオンライン版など、大きなメディアも賑わせた衝撃的ニュースの真偽やいかに？興味のある方は、Bailey 氏の本や、Mark Twain Forum でのトウエインの専門家による Bailey 氏の本の書評などをご覧ください。死後 100 年たっても世間の注目を浴び続けるトウエイン。彼が墓の中から蘇ったら、さてなんというでしょう。

Susan Bailey, The Twain Shall Meet: The Mysterious Legacy of Samuel L. Clemens' Granddaughter, Nina Clemens Gabrilowitsch.

Mark Twain Forum 書評: <http://www.twainweb.net/reviews/BaileyGosselin.html>

(追記)なお 2015 年 7 月下旬に開催されるハンニバルでの国際マーク・トウエイン学会(Mark Twain's Hannibal: The Clemens Conference)にてこの Susan Bailey 氏が基調講演をされる予定です。

★会費納入のお願い

本協会は会員の皆様の会費ですべて運営されております。会費の納入を何とぞお願いいたします。

会費は一般会員 4000 円、学生会員 2000 円です(お間違えなきよう！)

振込先は以下の通りです。

口座名称: 日本マーク・トウエイン協会

口座番号: 00140-6-554646

～編集後記とご入会への誘い～

日本マーク・トウエイン協会にご入会いただけましたら、年 1 回刊行される会誌(和文号『マーク・トウエイン——研究と批評』)と 4 年に 1 回程度の頻度で刊行される英文会誌(*Mark Twain Studies*)に加えて、年に 2、3 回程度刊行される Newsletter を受け取ることができます。この「HP サンプル版特別編集号」は活気あふれ、国際的な交流も活発に行っております当協会の様子を一部ご紹介すべく、これまでに刊行した Newsletter 36 号にご寄稿いただいた読み物を中心に、2015 年 4 月より新体制を迎えますことから第 7 期会長の巻頭挨拶(37 号掲載分)を加えた特別編集号になります。36 号の編集にあられた石原剛先生をはじめ、趣旨をご理解くださり、編集号への転載をご快諾くださった皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございました。まだ当協会にご入会されていなくてマーク・トウエインにご関心のある皆様、学部生から社会人の皆様まで広く歓迎いたしますので、ぜひ私たちと一緒にマーク・トウエインに関する研究を深め、意見や情報を交換させていただきたくらと願っております。お気軽に事務局までご連絡ください。送付刊行物だけではなく、年に 1 回全国大会を開催していますので会員外の方も心より歓迎いたしますのでぜひお越しください。(KN)

日本マーク・トウエイン協会事務局



“A great and priceless thing is a new interest!

How it takes possession of a man! How it clings to him, how it rides him!”

——Mark Twain (*A Tramp Abroad*)

事務局は 2015 年 4 月より、大東文化大学経済学部中垣恒太郎研究室内に移ります。